

て行かれてはたまらないからです。

食事は主としてボミーの粉末と高粱の粉末を混ぜて糊状の物を固くした物とフレープを常食として、米は一年に一回くらいで碎けた米だけでした。生ニシンの味も忘れることができせん。

電気、水道、ガス、新聞等もなく、在ソ中は一般のロシア人と接触する機会もなく、従って残念ながら話をすることもできませんでした。

砂漠の中にニュータウン

石川県 安本 千秋

私は、明治四十二（一九〇九）年奥能登の輪島に生まれた。父は医者と神主が兼業という変わり種で、私も幼時から祝詞を口ずさんだり、笛を吹いていた。

輪島中学から東洋大学に入り、神道の研修も受けて神職の資格を得て帰郷した。親戚の安本家を継いで門前町の諸岡比古神社を主に、兼務神社三十一社の宮司

となったが、社はどこもかしこも荒れていた。折から日中戦争、大東亜戦争となつて、出征兵士の武運長久の祈願は引きも切らず、参詣者も足しげくなって、社殿の修復、鳥居、石灯籠なども復旧することができた。

昭和十八年の暮れ、遂に私にも召集が来て、出征した先は北支の邯鄲。訓練もそこそこに北支の討伐作戦に参加、独立旅団の助っ人大隊として東奔西走した。終戦は満州の公主嶺の山中。ソ連軍の指揮下に入つて黒河からブラゴエに。満州から略奪された物資の山、その運搬と貨車積みにかき使われた後、貨車に詰め込まれて西へ西へと約一カ月の旅。着いた所は世界一の大湖といわれるカスピ海に臨んだクラスノボドスタという砂漠の中の街であった。酷寒のブラゴエとは正反對の酷暑の地での抑留生活。住まいは地下壕の中の多段式ベッドに押し合つて南京虫に攻められた。

労働の内容は、後でわかつたのだが、砂漠の中のオイル・ニュータウンの建設で、この小さなトルクメン共和国は、対岸のアゼルバイジャン共和国とともに

「オイルブーム」に湧き上がったわけである。仕事は建材に使う石の割り出しで、山から掘り出した巨石を石斧で直方体に切る力仕事。ノルマは一日に百個だった。カスピ海の水は塩分があつて飲めず、遠くのオアシスから鉄道で運んで来る。のどが乾いて夜中に水を盗みに行つては看視兵に何度追いかけられたことか。

夏は酷暑華氏百度、冬は零下三十度、文字通り無味乾燥の砂漠地帯で、出稼ぎのウズベック人、カザフ人らと働いて丸三年、二十三年十月に舞鶴に帰還したが、上陸と同時に入院して一カ月。見舞いに来た家内の話で留守宅の状況を聞いて一安心したものの、病状は良くならず金沢の国立病院にまた入院一カ年、腐蝕した腎臓の片方を摘出、睾丸も片方抜かれ、その後また腎臓結石で苦しむなど傷痍軍人となったが、近年ようやく健康を回復して神明奉仕の日々を暮らすことができるようになった。

肝心の家内がとうとう昭和五十一年に脳血栓で倒れ、私が看護に当たる役割交代となったが、私の八年余の留守中はもとより、六人の子供を抱えて一家を守

り通してくれた妻の愛情と執念は何度頭を下げてでも下げ足りない。繁忙の傍ら、地区の民生委員を三十年以上も務めてくれたが、昭和六十年遂にその生涯の幕を閉じた。「母は強し」の言葉をつくづく想うのである。私の信念とする言葉は、神は人の敬によって威をまし、人は神の徳によって運を添う、ということである。残り少ない人生を悔いのないように一日一日を大切に、神明奉仕の精神を忘れずに暮らしてゆきたいと思っている。

抑留生活中での一こま

石川 泉 松本 忠 男

昭和十六年十二月地元高等工業学校を繰り上げ卒業し、民間企業に就職もつかの間、翌年二月一日、現役兵として東部第四九部隊（歩兵第七聯隊留守隊）に入隊。幸いに技術部幹部候補生に合格し、幹候教育修了後赴任したのが東京府中町（当時）にあった陸軍燃料